



みのる法律事務所便り
第382号
令和4年2月



みのる法律事務所
弁護士 千田 實
〒021-0853
岩手県一関市字相去57番地5
TEL:0191-23-8960
FAX:0191-23-8950



い な べ ん だ べ ん く
田舎弁護士の駄弁句 (111)



どうけん ばんけん
闘犬や 番犬なども いるけれど
もうどうけん
なれるものなら 盲導犬に

令和4(2022)年2月10日

あおぞらうきよのすて
青空浮世乃捨

80歳記念本の一冊として、『地方弁護士の役割と在り方』という駄弁本を書いています。

弁護士は民事裁判の代理人として、相手方弁護士と裁判で闘ったり、刑事裁判の弁護人として検察官と闘ったりしています。弁護士の役割には、喧嘩犬などと揶揄されることもある闘犬という一面があります。

弁護士は、国家機関や地方機関が憲法や法律などに違反があったり、違反しそうになったら、憲法や法律を守る番犬として吠えなければなりません。弁護士の役割には、家や財産を外敵から守る番犬という一面があります。

地方弁護士生活52年となりますが、闘犬と番犬の役割は、曲がりながらも果たしてきました。ですが、盲導犬としての一面はほとんど果たしていませんでした。これからは盲導犬になりたいと思います。

三省堂の新明解国語辞典は「盲導犬」とは、「盲人の道案内や生活介助をするように特別の訓練を受けた犬」と解説しています。地方弁護士の役割として、そのような役割を果たしたいのです。

盲導犬になりたい



—地方弁護士^{たわごし}の役割と在り方—

闘犬的な仕事も番犬^{ばんけん}の仕事も地方弁護士としてやってきましたが、これからは、先が見えないで悩んでいる地方住民のために、道案内をする盲導犬の仕事をしてみたいです。

80歳記念本の一冊『地方^{たわごし}弁護士の役割と在り方』は、使役犬^{しえきけん}、英語では working dog (ワーキング ドッグ) に準えて述べてみたら、分かり易く親しみ易い本になるのではないかなどとの考えが湧いてきました。

その思いをそのまま「岡犬^{おかいぬ}や 番犬^{ばんけん}なども いるけれど なれるものなら 盲導犬に」と詠みました。文字通り駄弁句です。

地方^{たわごし}弁護士を52年経験させてもらっています。今年の5月20日で満80歳となります。暇潰しに、「80歳記念本」を出そうと決めました。

一つは、『人生100年時代の年寄りの生き方』について書きたいのです。もう一つは、『地方^{たわごし}弁護士の役割と在り方』について書きたいのです。

人生100年時代の年寄りの生き方は、『年寄りの心得集と進化論』と『長生きを楽しむコツ』と『人生100年時代の年寄りの生き方』の三部作の原稿はでき、印刷製本に入っています。

『地方^{たわごし}弁護士の役割と在り方』は、いま書いています。何を書かか、どのように書いたらよいかなどと考えながら試行錯誤をし、楽しんでます。

そんな中で生まれた句が前句です。地方^{たわごし}弁護士は「喧嘩犬から氏神様へ」という話を書いていましたら、地方^{たわごし}弁護士の役割は使役犬に似ている気がしてきました。そこで、地方^{たわごし}弁護士を使役犬(ワーキングドッグ)に引き比べて述べたら分かり易く、親しみ易いのではないかと気がきました。

弁護士を犬と引き比べるとは、けしからんと、他の^{たわごし}弁護士先生からは叱られそうですが、どうか老^{たわごし}弁護士の戯言「特に深い意味のないふざけたこと」デタラメの話として笑って許して下さい。

犬の多くはペットとして飼われています。愛玩動物^{あいがんどうぶつ}です。可愛がる対象です。で

すが弁護士はペットの役は果たせません。どの地方弁護士を見てもペットとなりそうな人はいません。

ペットになろうなどと思い違いをしている弁護士はあまりいないでしょう。それでも時々「ペットを目指しているのかな？」などと思う弁護士に出会うことがあります。自分のおかしさを棚に上げ、「おかしいのではないか」と思ったりすることがあります。地方弁護士は使役犬(ワーキングドッグ)に徹した方がいのような気がします。

使役犬には、番犬、^{りょう}獵犬、^{いぬ}そり犬、^{ぼくようけん}牧羊犬、^{など}軍用犬、災害救助犬、警察犬、警備犬、探知犬、盲導犬、介助犬、タレント犬等々数え上げたらきりが^{わず}ないほど仕事があるようです。地方弁護士の役割は、それに比べれば、ほんの僅かです。いまさら、そんなことに気がきました。

探知犬だけでも、地雷探知犬、爆発物探知犬、麻薬探知犬、銃器探知犬、検査探知犬、DVD探知犬、がん探知犬、シロアリ探知犬、トコジラミ探知犬、コロナ探知犬などがあるとのこと。犬の役割の多種多様さにびっくりしました。

地方弁護士だって、やる気になれば使役犬に負けないほどの仕事はありそうな気がします。しかし「その仕事は何か」と自問しても、それほど多くの答えは出てきません。地方弁護士は、それほど多くの仕事をやっていないのです。

地方弁護士52年間の中でやってきたその仕事は、闘犬のような仕事と番犬のような仕事だけだったような気がします。80歳となるいま^{じくじ}忸怩たるものがあります。心の中で深く恥じる気持ちが湧いています。

生きている限りは、地方弁護士として現役を張り続けます。この先も地方弁護士を続ける身としては、これから先、闘犬と番犬のような役割だけではなく、盲導犬や介助犬も目指したいと思います。

ですが、現実には介助してもらわなければならない状況にある身としては、介助犬的役割は果たせません。盲導犬的役割に徹したいと思います。

盲導犬は、盲人の道案内をするのですが、道案内をしてもらっている盲導犬のユーザーの方の「目的地につくまでの苦労を半分、目的地についた時の喜びを2倍にしてくれるのが盲導犬です」という言葉には深く共鳴しました。

地方弁護士は、悩みを抱えるクライアントと一緒に苦労を半分、解決した時の喜びを2倍にするような役割を果たさなければならぬと深く心^{こころ}に刻み込みました。地方弁護士は、悩みを抱える人と苦労と喜びを一緒にしたいものです。

盲導犬には、三つの基本的な仕事があるそうです。一つは角^{かど}を教える、二つは段差を教える、三つは障害物を教えるのだそうです。この三つの基本的な仕事を組み合わせて、盲導犬の歩行が成り立っているそうです。

地方弁護士にも悩めるクライアントに対し、何を教えなければならないか、その基本的な仕事は何かを見極めなければならないと思います。それをしてきたかと、自らの52年の地方弁護士生活を振り返ってみますと忸怩たるものがあるのです。恥る気持ちで一杯となってしまいます。

法律の条文と判例と法理論に関する浅く薄い知識を切り売りし、クライアントから金を貰い紛争の相手方と裁判所というリング上で、代理戦争に明け暮れてきました。

裁判に勝った時は、クライアントは一時喜びます。負けた相手は一生悔しさが残ります。クライアントやその代理人を生涯恨み続けます。

一度限りの人生を、夫婦、親子、兄弟などという格別に深い縁で結ばれた人間関係を紛争や裁判で関係断絶などに導く地方弁護士の仕事は、反省しなければならない面が少なからずあります。

60歳から70歳までの10年間に10回を超える手術や人工透析などを繰り返し、妻から腎臓の移植を受け、健常者に近い状態まで戻れた身としては、臨死体験らしい体験なども踏まえて、『人生は、いまの一瞬を、まわりの人といっしょに、楽しみ尽くすのみです』という『いなべんの哲学』を確立するに至りました。

その『いなべんの哲学』に従えば、地方弁護士の仕事を使役犬^{なぞら}の仕事に準えて言えば、盲導犬のように、悩める国民、市民、住民に対し、人生の角、段差、障害物を教え、人生を楽しく送れるように導く仕事をしたいものです。

近々それが出来そうな歳となりました。是非そのような仕事をしたいものです。

盲導犬は、盲人に、角、段差、障害物を教えられるようになるために厳しい訓練をクリアしなければならないようです。

「そのような訓練をしてきたか」と自問自答すれば、「ノー」と言わざるを得ませんが、歳だけは重ねてきました。その経験をよりどころに、盲導犬的役割を果たしてみたいという気持ちが湧き、そのような思いをストレートに詠みました。

80歳となりますが、前を向いて歩き続けます。

